

St. Luke's International University Repository

The Nurse Clinic: toward an Integration of Clinical Nursing Practice, Research and Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片岡, 弥恵子, 林, 直子, 川越, 博美, Kataoka, Yaeko, Hayashi, Naoko, Kawagoe, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014938

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ナースクリニック — 看護実践, 研究, 教育の統合に向けての試み —

片岡 弥恵子¹⁾, 林 直子²⁾, 川越 博美¹⁾

要 旨

聖路加看護大学看護実践開発研究センターでは、看護実践、研究、教育の統合を目的として新しくナースクリニック事業を開設した。ナースクリニックは、医療施設ではない研究センターで実施される新しい形態の看護サービス提供モデルとして位置づけられる。本報告は、ナースクリニック事業の概要と実施状況を記述し、問題点および今後の課題を明らかにすることを目的とした。

ナースクリニック事業の概要としては、個人への相談・ケアを目的とした3事業、集団へのアプローチを主眼とする4事業が含まれる。個人相談・ケアでは、「末期がん在宅ケア相談」「母乳育児相談」「在宅高齢者の看護・介護相談」が開始された。集団へのアプローチでは、「乳がん女性のためのサポートプログラム」「天使の保護者ルカの会」「慢性疾患の子どもの家族と看護職の交流」「赤ちゃんがやってくる」が行われている。内容ならびに形態は多様であるが、看護職が独自の専門的な知識および技術を用いて市民に対する看護サービスを提供することが共通の目的である。これらの事業の多くは、本研究センターの専任・兼任研究員によって開発されたプログラムを実用化したものである。

ナースクリニックの利用人数は、コンスタントに維持されている事業もあるものの、多くが増加していない。今後看護サービスとして発展させるために、以下の課題が指摘されている。第一に、ナースクリニックの拡充である。さらに看護の専門性の高いサービス、プライマリーヘルスケアの提供を含む事業を立ち上げる必要性が高い。第二に、マネジメント体制の確立である。ナースクリニックの拡充を視野に入れ、効果的かつ効率的にナースクリニックが運営されるための人材が必要であり、将来的なネット上での運営管理に向けてシステムの構築が重視される。第三には、効果的な広報活動を検討する必要がある。最後に、人々の健康の指標と経済的分析の指標を含んだ評価ツールを作成し、ナースクリニック全体の評価を行うことがあげられる。

キーワード

ナースクリニック, 看護サービス, 看護教員の実践

I. はじめに

2004年4月、聖路加看護大学看護実践開発研究センター（以下、研究センターと示す）は、少子高齢化社会で生じている健康問題や社会の動向を、看護の視点でグローバルに捉え、科学的根拠を集積し、市民とのパートナーシップをとりながら、看護の提供方法を開発・研究することを目的に開設された¹⁾。研究センターは、研究活動、生涯学習支援、看護実践の場の提供、国際交流、研究支援、情報発信の6つの機能を柱としている。なかでも、看護学においてこれまで重大な問題とされてきた看護実践と研究の乖離を是正するために、実践と研究、

さらに教育の循環を推進することを活動の中心に位置づけている。

研究センターは、看護実践、研究、教育の統合を具現化するために、新たな看護サービス提供モデルとして「ナースクリニック」を立ち上げた。ナースクリニックは、1つの領域に特化した個別ケアのみならず、複数の多様な事業から構成されている。当初ナースクリニックは、個人への相談およびケアの提供のみを想定していた。しかしながら、新しい看護サービス提供モデルとしてさまざまな看護提供方法を包含するという新奇性を重視し、ターゲットとしている人や内容もさまざまで、個人相談・ケア、サポートグループ、クラスと多様な形態を含んでいる。ナースクリニックの各事業は、看護職が独自の専門的な知識および技術を用いて市民に対する看護サービスを確立させるという共通の目標をもっている。ナースクリニックは、医療施設ではなく大学のなかの研究セン

受付日2005年2月7日 受理日2005年4月15日

- 1) 聖路加看護大学看護実践開発研究センター
2) 聖路加看護大学21世紀COE研究員

ターという場において、独立型の看護サービス提供モデルの可能性を模索するための先駆的な試みであるといえる。

ナースクリニック事業の多くは、研究センターの専任あるいは兼任研究員である本学教員が開発にかかわった看護ケアやプログラムが基盤になっている。開発された看護ケアやプログラムの評価あるいは臨床実践での実用化の検討がその目的である。これらの看護ケアやプログラムは、現在の試験的運用段階を経て将来的には看護サービスとして確立することが最終的なゴールである。また、ナースクリニックでは社会のニーズは高いにもかかわらず、現在公的なサービスや医療施設では実施されていない事業も展開されている。このような事業の実施と評価を示し有効性を明らかにすることで、社会のなかで新しい看護サービスとして普及させることをめざしている。なお、研究基盤の事業に関しては原則的に無料で行っているが、その他に関しては料金を定め、サービスとして運用の妥当性を検討している。

さらに、ナースクリニックにおいて教育との連携という側面では、学部学生の臨地実習、そして大学院生の研究フィールドとして貢献している。学部学生の臨地実習の場としては、生涯発達看護論および家族発達看護論の実習生を半年間にわたって受け入れてきた。大学院生は研究フィールドの開拓のため、または興味をもっている現象や人々の体験の理解を深めるためにナースクリニックを活用している。また、学部学生および大学院生のなかには、知識と経験を広げるため、ボランティアとして参加する者も多にいる。

このように、大学の研究センターの新しい試みとしてナースクリニックを開設して1年目がほぼ終了した。そこで、ナースクリニックの課題と今後の方向性を明確化し、大学における看護実践、研究、教育のあり方を多様な視点から検討するために、これまで行ってきたナースクリニックでの実践を分析し、報告する必要があると考えた。

II. 目的

本報告は、聖路加看護大学看護実践開発研究センターで実施されているナースクリニック事業の概要と実施状況を記述し、問題点および今後の課題を明らかにすることを目的とする。

III. ナースクリニックの概要

ナースクリニック各事業の概要を表1に示した。ナースクリニックは、個別相談・ケアといった個人をターゲットとした事業と、サポートグループやクラスというような集団を対象とした事業に大きく分けられる。

1. 個人へのアプローチ

個人相談・ケアでは、2004年6月「末期がん在宅ケア相談」、9月「ルカ子母乳育児相談室」、12月「在宅高齢者の看護・介護相談」がそれぞれスタートした。「末期がん在宅ケア相談」は、文部科学省科学研究費補助金で開発した“末期がん在宅ケアプログラム（専門職向け・家族向け）”²⁾を活用したサービスとして、末期がん患者・家族が、病院から在宅への移行や在宅でのケアに関する不安や問題を解決することを目的に行われた。本学の21世紀COEプログラムとして位置づけ、月に2回午前中、大学の教員3名に加えて大学院生1名が相談を担当している。相談は、原則的に事前の予約によって把握したが、聖路加健康ナビスポット（研究センターで毎日開かれている健康相談事業）を訪れた相談者を紹介という形でも受け、連携体制をとっていた。

母乳育児に関する相談は、育児期の女性のニーズが最も高いが³⁾、地域に十分な支援体制が整っているとはいえない現状がある。「ルカ子母乳育児相談室」は、週に1回育児中の女性の母乳および育児に関する相談・ケアが行われている。母乳育児中の乳房・授乳トラブルに対応するため、専門的な知識と技術を有する助産師（教員、大学院生）が担当した。乳房・授乳の状態に応じて、複数回の来所が必要になる場合もあった。また、利用者の利便性を重視し、研究センターへの来所のみならず家庭訪問も適宜実施された。

「在宅高齢者の看護・介護相談」は、高齢者および家族を対象として、在宅生活が安心して継続できることを目的として開始された。原則的に予約制で、週に1回午前中に相談時間を設けている。相談日ごとに、在宅呼吸ケア相談、食事と栄養相談、認知症介護相談など相談実施者の専門を生かした体制を組んでいる。相談に加えて、一般的な高齢者に向けて季節に合わせた健康生活情報の発信も行っている。

2. 集団へのアプローチ

集団へのアプローチは、「乳がん女性のためのサポートプログラム」「天使の保護者ルカの会」「慢性疾患の子どもの家族と看護職の交流」「赤ちゃんがやってくる」の4事業が行われている。

「乳がん女性のためのサポートプログラム」は、1999～2002年度の文部科学省科学研究費補助金による「がんデイケアモデル開発のための実証的研究」の研究成果の一部として開発されたプログラムである^{4)~6)}。このプログラムは、乳がん患者が自らの思いを言葉にし、同病者・医療者と分かち合える場を提供すること、また参加者間のネットワークづくりの場を提供することを目的としている。主要なテーマに、誰かと病気のことを分かち合えているか、病気とどのように付き合っているかを掲げ、自由な話し合いができるようファシリテーター（臨

床の看護師、教員)が場の調整を図っている。2004年度からは、このプログラムの看護サービスとしての実用化に向けた試行段階として、ナースクリニックで月1回実施した。参加者は、さまざまな治療や治療による副作用に関する情報を得る場として、身内や近しい友人にも語ることでできない思いを吐露する場として、また治療の副作用や再発の恐怖などさまざまな事態に対する不安な思いを表出する場として活用している。

「天使の保護者ルカの会」は、死産や流産などで子どもを亡くした女性やその家族が、同じ体験を持つ人と語り合い、心の支援をすることを目的としたセルフヘルプミーティングである。「お空の天使パパ&ママの会」というセルフヘルプグループとの共催で、2004年9月より開始された。がんターミナル期の患者および家族のセルフヘルプグループはよく知られているが、死産や流産を経験した女性および家族のグループは新しい試みである。グループの運営スタッフは、同じ体験をした女性たちと大学スタッフとで構成され、月に1回開催している。運営においては、参加者の心情やプライバシーに配慮した環境をつくることにも重点がおかれた。

「慢性疾患の子どもの家族と看護職の集い」は、2004年10月からスタートした。これまで、慢性疾患をもつ子どもの健康支援は、医療施設、保健所、そして学校(保育園)の連携が重要であるにもかかわらず、地域における支援システムは十分とはいえない現状があった。そこで「慢性疾患の子どもの家族と看護職の集い」は、慢性疾患をもつ子どもとその家族、そして地域の看護職(病院・診療所の看護師、保健師、養護教諭、保育園の看護師)との交流を通じて、子どもと家族への直接的な支援のみならず、子どもを中心とした連携体制の構築と強化を目的としている。各月でテーマを設定し、たとえば1月のテーマは「アレルギー疾患(喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなど)」で、子どもの生活、治療・療養、保育園や学校など集団生活のことに関する相談や情報交換の場を提供する計画である。NPOとの連携ももち、より包括的な支援体制を模索している。

近年、助産所や医療施設において、上の子どもたちを含め家族で出産を迎えるという試みが始められている。これまで、医療施設や公的なサービスとして出産準備クラスが行われてきたが、多くが母親となる女性、夫婦を

表1 ナースクリニック事業の概要

形態	名称	目的	対象	実施回数	実施者	料金
個人相談 ・ケア	末期がん在宅ケア相談	末期がん患者および家族が、病院から在宅への移行や在宅でのケアに関する問題を解決できる。	末期がん患者/ 家族	2回/月 午前中	大学教員3名, 大学院生1名	無料
個人相談 ・ケア	ルカ子母乳育児相談室	母乳育児中の女性が、母乳に関するトラブルおよび育児に関する不安を解決できる。	育児中の女性	4回/月	大学教員2名, 大学院生1名	有料
個人相談 ・ケア	在宅高齢者の看護・ 介護相談	看護・介護相談や季節に応じた生活情報の発信により、慢性疾患や老化によって生活が困難となった高齢者および家族が、共に安心して在宅生活が継続できる。	在宅高齢者/ 家族	4回/月 午前中	大学教員3名, 博士研究員1名	無料
集団	乳がん女性のための サポートプログラム	乳がんをもつ女性が主体的・効果的に治療を継続し、治療を受けながら充実した生活が送れるよう、個々の体験を分かち合う場となる。	乳がんの治療を 継続しているま たは治療を受け た女性	1回/月	大学教員2名, 看護師2名	無料
集団	天使の保護者ルカの会	流産・死産などで子どもを亡くした女性が、セルフヘルプミーティングに参加することで同じ体験をもつ女性と体験を共有する。	流産・死産など を体験した女性 /家族	1回/月	大学教員1名, 大学院生1名	無料
集団	慢性疾患の子どもの 家族と看護職の集い	慢性疾患の子どもと家族が、地域の看護職との交流を通して、有用な情報やリソースを得ることができる。	慢性疾患の 子どもと家族	1回/月	大学教員2名	無料
集団	赤ちゃんがやってくる	兄姉になる子どもが生命の誕生や性について学び、自分の生・性を大切にできると同時に、弟妹を迎える心の準備ができる。	兄姉になる子ど も、次子を妊娠 中の女性/家族	1回/月	開業助産師1名, 大学教員2名	有料

対象としたものであった。「赤ちゃんがやってくる」は、新しく兄姉になる子ども（幼児）が、妊娠・出産、新生児、そして性について学ぶことを第一の目的としている。妊娠・出産に関する正確な知識を得ることに加えて、子どもたちが自分を大切にすることを学び、弟妹を迎える心の準備ができることも重要な目的である。さらに、子どもたちへのクラス終了後は、実施者の助産師を囲んで親たちとの質問および話し合いの時間を設けている。親の上の子どもへの接し方、また今後どのように生・性について教えていけばよいのかに関するヒントを得る場となっている。

IV. ナースクリニックの実施状況

1. 広報

ナースクリニックの広報は、各々の事業でカラーのポスターおよび三つ折リーフレットを作成し、研究センターおよび大学の広報スペースおよびホームページ、各事業のターゲットとなる人が利用する公共施設、医療施設、または近隣の商店に配布した。「天使の保護者ルカの会」は、その内容が評価され新聞に掲載されたため、広く参加者を募集することができた。

2. 実施場所

ナースクリニックの実施場所としては、個人相談は相談室、サポートグループは会議室（20名程度収容可）、クラスは多目的ルーム（60名程度収容可）で行われた。個人相談が行われる相談室は、机と椅子、診察用ベッド、記録などを保管する収納棚が設置されている。会議室は、複数のテーブルと椅子が設置されているが、用途によって配置を変えることができる。多目的ルームは、通常オープンスペースになっており、目的にあわせてテーブルや椅子の配置、絨毯、マットを用いることができる。どの部屋も白い壁で装飾などがないため、各々の事業の対象や内容にあわせて、ポスターや観葉植物、図書などを設置した。たとえば、幼児が集まる「赤ちゃんがやってくる」では、キャラクターの絵やおもちゃなどで飾り付けをして、子どもたちが楽しめる雰囲気づくりに努めた。一方、「天使の保護者ルカの会」では、参加者の緊張を解きほぐすための音楽や絵、ハーブティを用意すると同時に、赤ちゃんや子どもの写真は外すなどの注意を払った。

3. ナースクリニックの実施

表2にナースクリニックの各事業の実施回数ならびに

表2 ナースクリニック事業の実施状況（2004年5～12月）

名称	実施月	開催回数	利用人数
末期がん在宅ケア相談	6月	2回	1名
	7月	2回	0名
	8月	2回	0名
	9月	2回	1名
	10月	2回	1名
	11月	2回	0名
	12月	2回	0名
ルカ子母乳育児相談室	9月	4回	6名（うち訪問3名）
	10月	4回	5名（うち訪問1名）
	11月	3回	3名（うち訪問2名）
	12月	3回	3名（うち訪問0名）
高齢者の健康生活相談室	12月	3回	0名
乳がん女性のためのサポートプログラム	11月	1回	9名
	12月	1回	2名
天使の保護者ルカの会	9月	1回	0名
	10月	1回	6名
	11月	1回	3名
	12月	1回	2名
赤ちゃんがやってくる	7月	1回	12家族（36名）
	9月	1回	5家族（14名）
	11月	1回	12家族（37名）
慢性疾患の子どもの家族と看護職の集い	10月	1回	4名
	11月	1回	4名

利用人数を示した。「末期がん在宅ケア相談」は、6カ月で3名の利用者があった。「ルカ子母乳育児相談室」は、9～12月の4カ月で14回開催し、17名の利用者があり、1回の平均利用者は1.2名であった。「在宅高齢者の看護・介護相談」は、1カ月での利用者は0名であった。

「乳がん女性のためのサポートプログラム」は、1回目9名、2回目2名であった。「天使の保護者ルカの会」は、9月はスタッフの打ち合わせのため0名となっているが、その後は3回開催して、1回平均3.7名(2～6名)の参加があった。「赤ちゃんがやってくる」は、1回平均9.7家族(5～12家族)で、親と子どもを合わせると平均29.0名(14～37名)の参加があった。「慢性疾患の子どもの家族と看護職の集い」の参加者は、10月4名、11月4名であった。

4. ナースクリニックの評価

ナースクリニックの各事業は、実施および評価の方法を事前に計画書として提出している。評価方法に関しては、研究センターが作成した評価表を用いたり、各事業の責任者が事業の内容や形態にあった方法を採用している。

研究センターで作成した基本的な評価項目は、「事業の内容」「利用・参加人数」「スタッフの対応」「会場の快適さ」「利用・参加費」についてであり、3段階の選択肢を設けている。各事業ではこれらの項目に加えて、各々の内容に則した質問項目を設定している。たとえば、「赤ちゃんがやってくる」では、事前のアンケートで、事業を知った経緯、参加理由、事業に対する希望、質問などの情報を収集し、事後のアンケートでは、研究センターで作成した項目に加え、意見および感想など質的なデータを収集している。さらに、出産後には、クラスを受けたことによる子どもの変化についても随時報告してもらっている。

また「乳がん女性のためのサポートプログラム」では、毎回終了時に参加した会の感想と、今後このプログラムに望むことを問う簡単なアンケートを実施し、プログラムへの示唆を得ている。これまで「同じ経験を共有した人の話が聞けてよかった」「自分のことを話す機会ができて嬉しかった」という感想と、「情報交換・意見交換の場にしたい」「さまざまな治療法(新薬、民間療法)を知りたい」などの希望が寄せられている。

V. 考察

1. 大学における看護実践の場

看護実践、研究、教育間のギャップは、これまで看護学において重大な問題として指摘されてきた。これらのギャップを作り出す要因のひとつに、看護教員が実践に

携わる機会が少ないことがあげられる。この観点から、大学のなかの実践の場としてのナースクリニックの存在は、解決の糸口を見出す可能性をもつと考えられる。実際すべてのナースクリニック事業において本学教員である兼任研究員が看護実践者として参加しており、大学の業務の一部として認められつつある。今後、ナースクリニック事業が拡大し活発化すれば、さらに多くの教員が日常的に看護実践にかかわることが可能になる。大学のなかで看護実践の場をつくること自体、新しい試みであり、プロセスを含みその効果については未だ報告されていない。それらを明らかにしていくことは、今後の重要な課題である。

またナースクリニックは、医療施設ではない大学の研究センターにあることがユニークな点ともいえる。米国においてはナースプラクティショナーが地域のなかでプライマリーケア提供者としての役割を確立し、その支援の有効性が検証されている⁷⁾。日本でも、訪問看護、ストーマケアなどの開業看護師、開業助産師の実践報告がある⁸⁾。ナースクリニックの個人相談・ケアである「末期がん在宅ケア相談」や「母乳育児相談」などは、看護職の開業のモデルの要素をもっている。ナースクリニックは、医療施設にないからこそ、看護職が独立して起業または開業する新しい看護提供モデルを試行し、収支を考慮したサービスという観点から検討することができる。今後、ナースクリニックの事業が独立型の看護提供モデルのひとつとして確立することが目標といえるだろう。しかしながら、ナースクリニックが大学にあることに由来する課題や問題点も出てきている。医療施設など他機関との連携体制の強化、マンパワーの確保、料金の設定基準などが今後検討していくべき課題といえる。

2. ナースクリニック事業の拡充

ナースクリニック事業は、これまでのところ本学の研究員からの提案を起点に、運営委員会の審議を経て実施されてきた。しかし今後は、詳細なニーズ調査や聖路加健康ナビスポットを訪れた市民からの意見を重視し、新たな事業を提案していく予定である。また、市民とのパートナーシップをとりながら、市民との協働を主眼とした事業も検討中である。

さらに、ナースクリニックでは、看護の専門性の高い多様なケアが提供されることも期待される。聖路加国際病院では、WOC(創傷・オストミー・失禁)、がん緩和ケア相談、糖尿病相談、感染看護など高い専門性を有するリソースナースの活躍が報告されている⁹⁾。外部の医療職への謝金や拘束時間の扱いに関する検討は必要であるが、今後積極的に協力および連携体制を確立していきたいと考えている。

また、ナースクリニックの重要な役割と考えられるのが、地域に密着した形でのプライマリーケアの提供である。ヘルスプロモーション活動、フィジカルアセスメン

ト、カウンセリング、診療の前後における相談などが含まれる。研究センターの所在地は、ビジネス街で、夜間人口が少なく、高齢者人口の率が高いことが特徴である。新たにナースクリニックとしてこれらの活動を開始するために、地域コミュニティの調査を綿密に行ったうえで、地域性を生かしたサービスの展開を視野に入れなくてはならない。

3. ナースクリニック事業のマネジメント

このように多様な事業を展開するにあたり、事業の計画、実施、評価を通して全体をマネジメントする人材が必要になってきた。ナースクリニックの事業の利用者または参加者は、疾患をもっている人、末期がん患者、子どもを亡くした女性などであり、環境や事業内容にきめ細やかな配慮を要する。さらに、プライバシーの保護、記録類のフォームや保存方法にも注意を払わなくてはならない。したがって、個々の事業内部での対応のみならず、全体を把握したうえでのマネジメント体制が必要である。また、今後ナースクリニック事業が拡充した際には円滑で効率的な運営を図るため、場所や物品の予約、実施者と研究センタースタッフとの連携などをインターネット上で行うことができるシステムを構築することも重要視される。

ナースクリニックの評価に関しては、個々のナースクリニック事業の評価だけではなく、ナースクリニック全体としての評価方法を早急に検討し、評価を実施することも今後の課題といえる。その際、市民の健康をアウトカムとした分析、経済分析を視野に入れる必要があるだろう。またすべての事業は、計画書のなかで予算と支出、収支の提出を必要条件としている。将来的には、人件費を含めた収支バランスを検討し、採算性のある看護サービス事業として確立する必要がある。

4. ナースクリニック利用者の拡大に向けて

今年スタートの年であったため、各事業は準備状態に則して随時スタートさせた。このため、計画的に広報することができず、参加者が少ない事業が目立った。また、参加者が少なかったもうひとつの理由として、サービスの日時と実施方法の設定が考えられる。たとえば、末期がん在宅ケア相談は予約制で隔週午前中のみの実施に設定していた。今後、利用者が利用しやすい時間帯を設定することが第一の改善すべき事項である。さらに、研究センターで毎日開催している聖路加健康ナビスポットなど既存のサービスとの連携体制を強化することも視野に入れる。ここで、専門相談の案内を積極的に行ったり、専門的な相談の希望がある場合に紹介・予約するシステムづくりを提案していきたい。

VI. おわりに

本報告では、聖路加看護大学の看護実践開発研究センターにおける新しい事業「ナースクリニック」における実践について報告した。開設して1年が過ぎ、その過程において起こった問題は、その都度話し合いをもって解決に至ることができた。現在ナースクリニックが抱える課題や問題を明らかにすることで、今後取るべき方向性を見定めることができる。行ってきた実践のプロセスを公的に提示し、広く意見を聴取したうえで、大学における看護実践、教育、研究の統合に向けての礎になることが期待される。

追記：2004年度ナースクリニック事業の実施者は以下の方々です。

聖路加看護大学：堀内成子、小松浩子、及川郁子、平林優子、亀井智子、長江弘子、酒井昌子、久代加代子、梶井文子、土屋円香

聖路加国際病院：金井久子

麻の実助産所：土屋麻由美

聖路加看護大学看護実践開発研究センター博士研究員：谷口好美

聖路加看護大学大学院博士後期課程：中川有加、太田尚子、大金ひろみ

聖路加看護大学看護実践開発研究センター：川越博美、林直子、片岡弥恵子、新幡智子

引用文献

- 1) 川越博美, 聖路加看護大学が目指す市民とナースと研究者の協働: 聖路加看護大学看護実践開発研究センター, *Quality Nursing*, 10(4), 19-24, 2004.
- 2) 福井小紀子, 川越博美, 在宅末期がんの家族に対する教育支援プログラムの適切性の検討, *日本看護科学学会誌*, 24(1), 37-44, 2004.
- 3) 磯山あけみ, 高橋芳子, 藤枝冴子, 糸賀三恵子, 褥婦への退院指導のありかた—産後の悩み・育児不安の軽減をめざして, *茨城県母性衛生学会誌*, 21, 57-59, 2001.
- 4) 小松浩子, がんデイケアモデル開発のための実証的研究, 平成11年~14年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書, 2003.
- 5) 片桐和子, 小松浩子, 射場典子他, 継続治療を受けながら生活しているがん患者の困難・要請と対処—外来・短期入院を中心としたがん医療に携わる看護婦の困難と対処, *日本がん看護学会誌*, 15(2), 68-74, 2001.
- 6) 酒井禎子, 小松浩子, 林直子他, 外来・短期入院を中心としたがん医療の現状と課題—外来・短期入院に焦点をあてて, *日本がん看護学会誌*, 15(2), 68-

74, 2001.

7) Broun SA & Grimes DE: A meta-analysis of nurse practitioners and nurse midwives in primary care, *Nursing Research*, 44(6), 332-339, 1995.

8) 前川厚子, 地域看護-開業ナースの歩みと進展, 看護展望, 26(2), 229-232, 2001.

9) 井部俊子, リソースナースのビジネスプラン, ナーシングトゥデイ, 17(14), 47, 2002.

The Nurse Clinic: toward an Integration of Clinical Nursing Practice, Research and Education

Yaeko Kataoka, Hiromi Kawagoe

(Research Center for Development of Nursing Practice, St. Luke's College of Nursing)

Naoko Hayashi

(St. Luke's College of Nursing, COE research fellow)

The “Nurse Clinic”, a new nursing service model, was established in 2004 to facilitate the integration of nursing practice, research and education in the Research Center for Development of Nursing Practice, St. Luke's College of Nursing. The objective of the current report is to describe the services of the Nurse Clinic in 2004. In addition, the utilization was analyzed and the limitations and solutions are presented.

Three services were established in a private clinic setting: “Consultation for cancer patients in the terminal stage”, “Lactation clinic” and “Consultation for the elderly and their families”. Four targeted small or large groups were established: “Self help group for women who lost a newborn baby”, “Support program for breast cancer survivors”, “Siblings' class on childbirth” and “Information exchange meeting with chronically ill children and their family”. These services were developed by researchers in the Research Center. Although these services in the Nurse Clinic were diverse, the shared purpose was to provide nursing care for clients using professional nursing skills and knowledge independently.

Some problems arose during this year, such as poor utilization. Four tasks were identified that could expand and improve the Nurse Clinic in the future. First, the need to start a new service that provides primary health care in the community. Second, in order to operate the Nurse Clinic effectively and efficiently a person should be employed to manage all of the services. In addition, a management system using the internet should be developed. Third, an examination of the effectiveness of publicity activities is necessary. Fourth, an evaluation of the Nurse Clinic should be implemented of not only the clients' health status but also of the economics of the Clinic.

Key Words

nurse clinic, nursing service, nursing faculty practice